

研究と授業のためのビデオ制作

福井 康雄

1. はじめに

教材研究室では、標記のようなテーマのもとに、平成8年10月から11月にかけて3回にわたるファカルティー・ディベロップメント・ワークショップを行った。高等教育機関で利用する「教材の制作と評価研究」を主務とする当室では、例年、所有する機器や蓄積したノウハウを応用して、主としてマルチメディアの制作技術にかかわるワークショップを実施してきた。今回の試みも、当初、同様の趣旨で企画されたものだが、当センターでは、丁度、この時期から日本各地の高等教育機関を通信衛星で結ぶスペース・コラボレーション・システム（SCS）が開局することとなったため、急遽、このシステムを利用した形でのワークショップを実行することとなった。

通常、ワークショップは、当室のマルチメディア施設に研修者を招いて行われる。しかし、この度の場合、SCSを利用した遠隔サイトからの参加者もいるため、講師にも、センターへ来所した参加者にも、SCSのスタジオに入ってもらい、丁度、テレビ会議のような形での研修を実施することとなった。また、通常、ワークショップというと、実技の研修を伴うものだが、今回は、遠隔サイトからの画像による参加者もいるため、講師による講義と参加者との質疑応答を中心とした、会議形式のワークショップとなった。

計3回にわたるワークショップの、主な内容は以下の通りである。

	講演 内容	講師
第一回 (10月11日 13.30～ 15.30)	生物科学映像の撮影と取材	菅野 瑋一 (株)カンノ・クリエイティブ代表取締役 大和田健 (株)カンノ・クリエイティブ技術担当
第二回 (10月18日 13.30～ 15.30)	授業研究のための教室記録	小町 真之 東京情報大学教授
第三回 (11月1日 13.30～ 15.30)	民族学を中心とした撮影と取材	姫田 忠義 民族文化映像研究所所長

(尚、上記の企画立案・準備・当日の進行等については、センター発信のワークショップというプロジェクトの性格上、万全を期して、FDメンバーを中心とした教材研究室の全員が携わった。)

何分にも、SCSを利用したワークショップは、誰にとっても初めての体験であったため、計3回の試みを通して、数々の混乱があったことは否めない。スタジオの運用について…機器の操作について…議事の進め方について…発生した各種の問題点については、いずれ、きちんと整理して総括されなければならないだろう。しかし、本稿では、それらについての検討は、他の機会に譲るとして、特に、3回にわたるワークショップでの講師の話や研修者との質疑応答の内容に焦点を絞って考察を進めていくこととしたい。

そもそも、この企画は、研究や授業のために、映像を利用したり制作している人々のために、映像制作を職業とするプロの体験が、役に立たないものか?…という“ねらい”から立案されたものである。その点では、講師の菅野氏も、小町氏も、姫田氏も、生物・教育・民族学といった、それぞれの専門分野において数十年にわたる長い制作経験を持ち、多くの優れた作品を仕上げてきたベテランであり、その講義の内容は、ワークショップの参加者へも、多くの感銘を与え、教材の利用や制作への意欲を、少なからず触発出来たものとする。

この際、教師教育教材の研究開発の一助として、計3回にわたるワークショップの内容の記録と、その考察の結果を記すこととした次第である。

2. 生物科学映像の撮影と取材（講師：菅野 琇一）

菅野講師は、まず、映像制作のポイントとなる手順には、以下の7段階があるとし、その各段階について、自身の具体的な体験にもとづく見解を述べる…という形で、講義を進めていった。

1. テーマの決定
2. 語り口の決定
3. シナリオの作成
4. 絵コンテの作成
5. 撮影におけるディレクターとカメラマンの役割
6. 野外撮影とセット撮影
7. 編集・仕上げ

菅野講師の話の内容を、最も特徴づけるのは、上記のうちの(1)から(4)までの、撮影以前の準備の段階に、大きな重点を置く…ということであろう。

「テーマの決定」とは、いうまでもなく、その映像によって何を訴え、何を伝えるか?…という、作品の核となるテーマワードを決めるということである。一般にテーマというと、作品の主題として外に発信するものだが、菅野講師は、この場合のテーマとは、作り手の動機を表す言葉であり、いわば、作り手の内側に、自身のテーマワードとして規定しておくべきものだという。そして、このテーマを、制作のスタートに当たって、出来るだけ短く簡潔な言葉や文字でまとめておくことによって、その後の制作活動が求心的に展開されることになるという。

「語り口の決定」とは、その映像の対象や目的、あるいは、その映像を語る主体の性格や、語る姿勢・スタンスなどを決めることだという。一般に、どのような映像が取材可能か予測の出来ない、生物映像のようなドキュメンタリー・タッチの作品の場合、このような作業は、取材の終わった最終段階で決めれば良いと考えられがちだが、菅野講師は、どのような作品にし

ていくかという方向性を、あらかじめ自分自身の内部に、きちんと確立しておくために、こうした作業は不可欠だという。

「シナリオの作成」に当たっても、同様に、菅野講師は、取材映像の予測のつきにくい生物映像の場合にも、取材の可否にかかわらず、まず、理想のシナリオを書いて置き、その内容を原点として、撮影現場の対応を考えていくことが大切なのだという。また、「絵コンテ作成」についても、教材映像の場合には、生物ドキュメンタリーであっても必要であり、そのことによって、作り手自身が被写体に何を求めているかが明確になり、何をいかに撮り、見せるべきかが分かってくるのだと主張する。

以下、菅野講師の話は、「撮影におけるディレクターとカメラマンの役割」、「野外撮影とセット撮影」、「編集・仕上げ」といったテーマのもとに続いた。そして、撮影に当たっては、出来るだけ多角的な視点をもつ必要性から、ディレクターとカメラマンは分業することが望ましい…といったことや、教材映像としての生物映像の場合には、出来るだけ分かりやすい画面を作るために、野外撮影と水槽などによるセット撮影を使い分けることが必要であり…編集に当たっては、まず、取材した画面の魅力に従ってつなぎ、次に、ナレーションの論理で切っていくと良い…といった、自身の経験の基づく、きわめて、具体的な指摘が行われた。また、自身が制作したイトヨリ、オオセグロカモメ、イザリウオなどの生物科学映像を映写しながら解説を行った後、岩手大学、上越教育大学、鳴門教育大学、兵庫教育大学などの、遠隔サイトからの参加者とテレビ画面を通じて質疑応答を行い、2時間にわたるワークショップを終了した。

3. 授業研究のための教室記録（講師：小町真之）

教師教育教材の制作などで、小中高校や大学での授業の取材に豊かな経験をもつ小町講師は、教室での授業の記録は、どのように行うべきか？…といった観点にテーマを絞って、以下の4点をポイントに、その講義を展開した。

（授業撮影の留意点）

1. 撮影以前の仕事
2. カメラ位置・カメラワーク
3. 照明と音声
4. ビデオの再生・分析／編集

まず、小町講師は、「撮影以前の仕事」については、以下の3点に留意することが重要だとする。

- A. ねらい、機材・要員・日程の検討
- B. 授業のポイントの把握
- C. 教室の下見

(A)で強調されたのは、制作にあたっては、何のために、誰に見せるためにビデオを作るのかといった、ビデオ制作のコンセプトを、あらかじめ、きちんと設定しておくことが大切だということである。また、どんな機材が利用出来るか、どんな人が参加出来るか、そして、取材対

象の授業が、いつ行われるかといったことの検討も重要な要素だとする。

(B)は、撮影に当たっては、授業案などで、授業がどう展開していくのかといった「授業の流れ」を把握しておくことが大切だということである。この作業によって、教師や子供たちの動き、利用される提示資料、発言者の順序などについての知識を、あらかじめ得ておけば、カメラで何をねらうかといった撮影計画を立てることが容易になる。

(C)の教室の下見の重要性については、自明のことであろう。撮影する授業を同じ時間帯で下見しておくことにより、日差しや騒音などへの対策を立てたり、また、カメラの配置や抽出児の確認やチェックをしておくことは、撮影以前の段階での不可欠の作業である。また、下見により、子供たちと顔なじみになっておくことにより、撮影当日の子供たちの緊張感を和らげることとなる。

「カメラ位置・カメラワーク」については、小町講師は、まず、画面を構成するには、教室全体の状況をとらえる画面（エスタブリッシング・ショット）、そして、個々の教師や子供たちなどの登場人物をとらえる画面など、多角的な角度からの画面が必要となるので、それらに対応したカメラを配置することが必要だとする。そして、教室記録を行うカメラマンの留意点として、以下の3点を挙げた。

(カメラマンの心得)

～フレームに何をを入れるか～

- ・授業の流れに注意すること
- ・ファインダーの外も見ること
- ・ほかのカメラマンの動きにも注意を（複数カメラの場合）

カメラマンにとって、何よりも大切なのは、取材対象の教室から、いかに作品の目的に沿った画面を切り取るか、といったことであろう。そうした目的を実現するには、上記の諸点のようなことに留意することは不可欠である。この他、小町講師は、カメラワークをスムーズにするために、場合によっては机等の配置換えしておくことの必要性や、複数のカメラの配置の意味、パンショットやズーミングの役割、カメラを固定するための方法…等々、カメラ操作の技術的な側面について、実体験に基づいた、きわめて具体的な解説を展開した。

以下、小町講師は、自身が担当した教材の画面なども、自由に駆使しながら、「照明と音声」では、照明機材やピンマイク、ガンマイクなどの役割について、また、「ビデオの再生・分析／編集」では、取材したビデオ画面の分析の方法などについて、教室での授業記録の実態に即した、きめの細かい指摘を行いつつ、きわめて実践的な講義を展開した。そして、講義の後、遠隔サイトから参加した岐阜大学、上越教育大学、鳴門教育大学、兵庫教育大学…等との、説明内容についての質疑応答を行い、ワークショップは終了した。

4. 民族学を中心とした教材と撮影（講師：姫田忠義）

姫田講師は、まず、その制作活動の基本を、日本や外国の基層文化を記録すること…と規定した。そして、基層文化とは、歴史的、時間的、空間的な違いを越えて、人類に共通に底流している精神文化のことであると定義した上で、長い制作活動の中で蓄積された、豊富な実践例

を挙げながら、映像手段を活用したフィールド・ワークのあり方、進め方についての話を、以下の五点を中心に展開した。

1. フィールド・ワークの重要性
2. なぜ映像手段かー映像手段の特徴と限界
3. フィールド・ワークと映像手段
4. 映像手段の活用を通じての新しい比較文化論の可能性
5. 映像手段とエティック（倫理性）

姫田氏の論点は、実に多岐にわたっており、一つに括ることが、なかなか困難だが、まず、「フィールド・ワークの重要性」ということでは、フィールド・ワークの基本は、対象から学ぶために“歩くこと”にあるので、“歩くこと”を重視しなければならないとされる。そして、なぜ歩くかといえば、歩くことによって必ず発見があるからであり、そこで発見するものとは、自分が一人で生きているのではないという認識であり、また、自分が知っていると考えている自然とはまた異なった、自然の多様な姿などだという。

こうした姫田氏の考え方の底には、現代人は、なんらかの形で精神的な閉塞状況に陥っているために、他者や自然の真の様相に目が行かなくなっているという認識があり、だからこそ、自分の足で歩いて、自分の手で何かを発見するフィールド・ワークが大切だとするのであろう。

こうして、フィールド・ワークがなぜ大切かを説明した姫田氏は、次に、では、フィールド・ワークに「なぜ映像手段か」という課題に入り、映像手段の特徴と限界などの話に移っていく。

姫田氏は、フィールド・ワークに映像を用いるのは、そのフィールドで営まれている人間の行為を見つめるため…だとする。そして、その人間の行為には、のびきならず、そのフィールドの自然がまつわりついているものなので、自然と結び付いた人間の行為を見つめることでもあるとする。そして、映像は、一見、目に見えるものしか写していないように思われるが、その映像を通して、その背後にある基層文化（精神文化）を浮かび上がらせていくものなのだと主張する。しかし、その際、文字であれば意識に上ったものしか表現されないが、映像の場合は、意図した以外のものも画面に写ってしまうので、そうした映像独自の特徴や限界も心得ながら、映像を活用していくことが肝要なのだとする。

では、このような考え方に立って取材を行う場合、制作者は、対象にどのような態度で接していったらよいのだろうか？

次に、姫田氏は、「フィールド・ワークと映像手段」、「映像手段の活用を通じての新しい比較文化論の可能性」といった課題に基づいて、フィールドでの取材の場合の自身の基本姿勢について、豊富な事例を挙げながらの説明に入っていく。

姫田氏は、自身の基本的な取材態度として、自分は何も出来なくても、対象を見つめながらそこにある…といった態度が重要なのだとする。そして、そうしたフィールド・ワークについての信念を抱くようになった契機として、かつて、対馬のある村に取材した際の一つのエピソードを紹介する。ある農家に泊った時のこと、その家の主人が、人手に渡った田地畑を、数十年働いた末に、やっと取り返した証しである借金証文を見せながら、“自分は、これを貴方に

見せるために生きてきたようなものだ…」と言ったのだという。すでに亡くなった妻にも、また、恥となるので近隣の村人にも見せられない借金証文を、行きずりの旅人である自分に見せながら、借金完済までの苦勞を語る姿に接して、姫田氏は、「何も出来ない自分でも、そこにいることに意味があるのだ…」という、フィールド・ワークでの取材における自身の性根のようなものを確立したのだという。

このように、自身の取材の基本姿勢を規定する姫田氏は、また、映像によって取材するということは、自身と対象との関係を写すということなので、問われるべきなのは、そこに、どのような人間関係を結ぼうとしているかということなのだ…と主張する。そして、注意しなければならないのは、制作した映像が、対象とした人達の幸せのために活用出来るかどうかといった「映像手段とエティック（倫理性）」にかかわる問題であり、常に、そのことを確認しながら取材を進めることが、制作者にとっては大事なことなのだという。

また、フィールド・ワークでは、誰と、どんな事象と関係を結ぶかが一つのポイントとなるが、姫田氏自身の場合には、絶えず、少数者のほうへと心が働くのだという。

姫田氏の講義は、自身の多彩な作品群も例としながら、上記のような論旨を、具体的な映像で後づける形で進んでいった。そして、講義の後、上越教育大学、岐阜大学、名古屋大学、鳴門教育大学…等の遠隔サイトからの参加者との質疑応答を行って、ワークショップは終了した。

5. まとめ

今回、ワークショップに登場した各講師は、同じ映像分野の制作者とはいえ、それぞれの専門も、また、作風も大きく異なっている。したがって、その講義の内容も、「研究と授業のためのビデオ制作」という同じテーマを掲げているものの、個々の製作者としての立場を反映した、きわめてバラエティーに富んだものとなった。

第一回目の菅野講師の話は、映像制作の各段階の諸問題を、きわめて多角的に、かつ具体的に論じたものであった。しかし、その講義や参加者との質疑応答の中で、氏が、一貫して触れているのは、カメラや編集などの技術的な側面もさることながら、映像制作に当たって大切なのは、まず、テーマや語り口を決め、シナリオや絵コンテを作成するなどといった、準備段階での基本的な作業を、きちんと行っておくべきだ…ということではなかったろうか。

一方、第二回目の小町講師の話は、菅野氏の講義が、どちらかという、市販などにも耐える、より完成度の高い映像教材を目指す場合の、一つの方法を解説したものであったのに比べて、大学などの教育者が、手近にある機材を使って、教室というごく身近な素材を取材する場合にどうすべきか…といった、特に、学内でのビデオ制作の初心者に焦点が絞られていたところに、その大きな特徴があったように考える。

そして、第三回目の姫田講師の場合には、前二回の場合とは大きく趣が異なって、映像教材の制作のスキルの解説というよりは、むしろ、教材制作の場合に限らず、制作者が対象に向かう時には、どんな心構えで臨むべきか…といった、制作者の根本的な精神のありように焦点を絞りながら、講義を展開されたのではなかったかと思う。

このように、計三回の講義を振り返ってみると、講師それぞれの立場と個性を反映して、そ

の内容は、大きく相違しているように見える。しかし、その主張されるところを、よく吟味してみると、その講義内容の外見的な相違にもかかわらず、三氏の話には、映像制作を行う場合の基本姿勢となる、共通した、一つのメッセージが込められているように思う。そして、そのメッセージとは、撮影時点での技術の解説というよりは、むしろ、「撮影以前の準備段階の大切さ」といったことに力点を置いて講義が展開したということではなかったろうか。

菅野講師が、繰り返し主張されたのは、撮影に当たっては、テーマや語り口、シナリオや絵コンテなどをきちんと設定しておくことの重要性ということであった。ドキュメンタリーのような、取材映像の予測のし難い作品の場合にも、一応、理想のシナリオを作っておき、自己の内部に、きちんとした動機づけと方向性を確立しておくことが必要だとする氏の考え方は、いわば、作品の「企画段階の準備」を重視する立場といえるだろうか。

とすれば、企画意図の設定などと並行して、主として、教室を下見して撮影対象をよく研究し、カメラや照明、音声などの配置や動きなどを検討しておくことの大切さを指摘された小町講師は、特に、「制作段階の準備」に重点を置く立場で話されたものとはいえないだろうか。

そして、終始、映像作品の取材する際の制作者の“心構え”にこだわりながら話された姫田講師は、映像の制作者の心のありよう、つまり、「制作の全段階における心の準備」を大切にす立場から講義を展開されたといったことにもなるだろうか。

最近の映像機器の進歩は目覚ましい。そして、鮮明な画像や音声を収録することは、あまり機器や技術に詳しくない初心者にとっても、さほど難しいことではなくなってきた。さらに、映像機器の日進月歩は、つぎつぎに、これまでに考えられなかったような新しい画像の獲得を可能にしようとしている。しかし、こうした風潮の中で、映像制作の専門家が、三者三様に、効果的な映像教材を作る条件として、技術的なテクニックよりは、むしろ、地道な準備段階の重要性を指摘されていることは、映像制作の在り方について、一つの示唆を与えるものではないだろうか。

教育の現場での映像制作には、その目的によってさまざまなケースがある。したがって、その制作技法も、決して一様とは言えない。しかし、より効果的な映像教材の制作を目指すのであれば、菅野講師の言うように、どんな形であれ、まず、テーマを立て、シナリオや絵コンテを作成し…また、小町講師の言うように、撮影以前には必ず、現場の下見をして撮影計画を立てたりしておく…といったことが、少なくとも、一つの手掛かりとなってくるのではないだろうか。

そして、その際には、姫田講師の言うように、その映像教材を、誰のために、何のために作るのかといった基本的な心構えを、絶えず、自己の中に問い続ける姿勢こそが必要となってくるのであろう。

【参考・講師紹介】

菅野 琇一

展示・映像企画製作会社「カンノ・クリエイティブ株式会社」代表取締役。多年にわたり、生物科学分野の多数の教育映画、ビデオ映像作品、博覧会・博物館映像等の制作を手掛ける。代表作品に、「動物を分類する」（青少年映画祭グランプリ・文部大臣賞）「動物の行動をさぐる」、（科学技術映画祭賞・文部大臣賞）、「マリンフラワー」（BGMビデオ映像年間最優秀作品賞）等がある。

小町真之

東京情報大学 情報文化学科教授。元情報教育開発センター 研究開発部助教授、兼制作部ディレクター。ディレクターとして、放送大学研究番組、教師教育教材、教授学習過程の映像化等、数多くの教育関連映像の演出を手掛ける。

姫田忠義

民族文化映像研究所・所長。多年にわたり、人類学や民族学分野の多数の記録映像の制作を手掛ける。1948年度 日本ペンクラブ賞受賞、1989年 フランス・芸術文学勲章オフィシエール勲2等受賞。代表作に、「アイヌの結婚式」（イタリア・ポポリ映画祭入賞）「周防 猿まわしの記録」（キネマ旬報第4位）、「越後奥三面一山に生かされた日々」（日本映画ペンクラブ、ノンシアトリカル部門第一位、シカゴ国際映画祭ドキュメンタリー部門 銀賞）等がある。